



## 第二五回(2月上旬号) 『ほしぶどう作戦』②

by 柴田耕太郎

文法力をつけたいが、無味乾燥な文法書など読みたくない。

そんな読者のために、人気小説の翻訳書にみる誤訳をとりあげ、文法面から解説してゆく。題材は最近映画化された『チョコレート工場』の原作者で、日本がロケ地になった映画「007は二度死ぬ」の脚本家でもあるロアルド・ダール(Roald Dahl)の短編集『キス・キス』(KISS KISS)。全11編を月二回、一年かけて点検してゆく。俎上に乗せる邦訳は開高健・訳『キス・キス』(早川書房)。

冒頭に誤りの種別と誤訳度を示したうえ、原文と邦訳、誤訳箇所を掲げます。どう間違っているのか見当をつけてから、解説を読んでください。パズルを解く気分で、楽しみながら英文法を学びましょう。

誤訳度：\*\*\* 致命的誤訳(原文を台無しにする)  
\*\* 欠陥的誤訳(原文の理解を損なう)  
\* 愛嬌的誤訳(誤差で許される範囲)

### ほしぶどう作戦

#### [ストーリー]

クロードとゴードンはガソリンスタンドの共同経営者。ヘイゼル氏が所有する森で密猟をすることに決めた。ヘイゼルは成金で、上流階級に入り込むための手段として、年に一度、自分の森で、雉の狩猟会を催している。その前に、ほしぶどうを使った新式の狩猟法でござり雉をせしめ、ヘイゼルの鼻を明かしてやろうというわけだ。ことは予定通り進んだはずだったが、思わぬ計算違いが生じた。ほしぶどうに注入した睡眠薬の量が少なく、仮死状態になっていたはずの雉が隠していたところから大量に飛び出し、二人の目論見は泡と消える始末に。

---

#### ●副詞：\*\*\*

---

The lane ran right up to the wood itself and then skirted the edge of it for about three hundred yards with only a little hedge between.

小道は森までまっすぐにのびていて、それから森のへりを三百ヤードばかりつづいているが、そこは道の両側に生垣がまばらにあるだけだ。

[解説]

between は副詞で「間に」。小道が森のところまでまっすぐに伸び、突き当たったところで 300 ヤードばかり森の縁を回りこんでいる。一つづきの低い生け垣が、森と小道の間を隔てていることになる。

修正訳：低い生け垣がずっと境目をつくっていた。

●動詞：\*\*\*

He kept his head moving all the time, the eyes sweeping slowly from side to side, searching for danger. I tried doing the same, but soon I began to see a keeper behind every tree, so I gave it up.

しじゅう頭を動かして、視線をゆっくり左右にくばりながら、油断を怠らなかつた。私もおなじことをやってみたが、まもなく、どの木立のかげにも番人のいることがわかってきて、途中で諦めてしまった。

[解説]

see は意味範囲がひろく「わかる」「理解する」の訳になることもあるが、ここは「(意識せずとも)自然と目に入る」の意味。恐怖感のため、いもしない番人がいるように見えてしまったのである。

修正訳：どの木のうしろにも番人がいるように見えてきたので、止めた。

●イディオム：\*\*

Poacher's arse is nothing to the punishment that a female is willing to endure.

密猟者の尻は、女性が嬉々として耐える罰とはくらべものにならないのだ。

[解説]

and は curved round to と ran along を並列。crest は(1)頂上 (2)尾根、だが ran along するのだ、(2)をとる。

直訳すると「野道が右に回りこみ、雉が生息している大きな森のほうへ丘の尾根沿いに走っている地点、に近づいていた」

修正訳：「野道が右に折れて雉のいる森に向かって尾根沿いに進む地点がまもなくだった」

## ●イディオム：\*\*\*

Claud had told me that the clearing was the place where the young birds were introduced into the woods in early July, where they were fed and watered and guarded by the keepers, and where many of them stayed from force of habit until the shooting began.

その空地で、ひなは餌を与えられ、水浴びをさせてもらい、番人に守られながら、ひなの多くは狩猟が解禁になるまでに習性からぬけだすのだ。

## [解説]

from force of habit は「習慣の力で」「習慣の力によって」→「習慣になっているので」。人間にあれこれ世話されるのが習慣になって、そのままシーズンまでその場所に留まる、のだ。

修正訳：**そこでそのままぬくぬくするのが習慣となるのだ。**

## ●代名詞：\*\*\*

Both birds turned their heads sharply at the drop of the raisin. Then one of them hopped over and made a quick peck at the ground and that must have been it.

と、一羽が跳んできて、急いで地面をついばんだが、ほしぶどうにちがいがなかった。

## [解説]

that は直前のことを、it は文中で問題になっていることを指す。ここでは that は「一羽が跳んできて、急に地面をついばんだ」こと。it は、上掲部分だけでは分からないだろうが「鳥の密猟に役立つ方法」。直訳すれば、「鳥が一羽跳んできて急いで地面をついばんだことが、自分たちが模索している一番効果的な密猟法であるにちがいがなかった」

修正訳：**これこそまさに求めていた密猟法だった。**

## ●名詞：\*\*

His lips were thin and dry, with some sort of a brownish crust over them.

唇がうすく、かわいていて、茶色のパンの皮みたいなものがくっついている。

## [解説]

crust には確かに「パンの皮」の意味もあるが、over とある以上「くちびる全体を覆っているのだ。with は状態を示す前置詞。「くちびる全体を覆ったある種の茶色っぽい堅い外皮をともなって」くちびるはうすく乾いていた、のだ。

例：A crust had formed on his lips.彼のくちびるはかさかさになっていた。

修正訳 (全体) : うすい唇は表面が茶色っぽくかさかさに乾いていた。

●名詞 : \*

Claud was in a whirl of ecstasy now, dashing about like a mad ghost under the trees.

クロードは、すっかり有頂天になって、気ちがいの幽霊そこのけに木の下をかけずりまわっている。

[解説]

「有頂天」(in a whirl of ecstasy 直訳は「有頂天の旋回状態」)から「気ちがい」の連想が浮かばない。mad は多義だが、ここは「陽気な」「浮かれた」の語義を採るべきだろう。

修正訳 : 浮かれた幽霊

●名詞 : \*\*

He spoke the name proudly and with a slight proprietary air, as though he were a general referring to his bravest officer.

まるで、勇猛果敢な部下の将校のことを口にした將軍のように、誇らしげに、ちょっと財産家らしい様子をみせて、名前をいった。

[解説]

proprietary を「所有者の」の原義から「物持ち」ととり、「財産家」の訳をあてたのだろう。だがこの將軍が所有するものは「将校」。つまり「有能な部下」を持っていることを誇りに思っているのだ。

修正訳 : 有能な手下を抱えている余裕を見せ

●動詞 : \*\*\*

But they were too doopy still to take any notice of us and within half a minute down they came again and settled themselves like a swarm of locusts all over the front of my filling-station.

しかし、まだ薬が効いているので、私たちにはいっこうに気がつかない。それどころか、三十分としないうちに、雉子どもはまたやってきて、ガソリン・スタンドの前に、バッタの群のように、落ちついてしまった。

[解説]

half a minute は「三十秒」。

修正訳 : 一分と経たないうちに